

# 千歳音頭

一、銀のネ

作詞 北郷 雪夫

## 「千歳音頭」 復活物語 2

空港や支笏湖など千歳の風景が歌詞に盛り込まれ、以前は地域の盆踊りでも盛んに踊られていた「千歳音頭」。

記事の後半では、この歌をもう一度郷土の伝統として広めようとする取組について紹介します。

支笏湖の風景が描かれた「千歳音頭」のレコード

銀の翼が 世界をつなぐ ヨイヨイ  
空の港も ひらけて晴れて  
今日もあちらの 今日もあちらの  
ホイホイホイ お客さま  
ソレ チトセヨイトコ  
アリヤリヤンリヤン  
シコツ ヨイヨイ ヨーイヤナ  
(くり返し)

千歳音頭がつくられたのは、今から60年以上も前のことです。歌詞には飛行機をあらかわした「銀の翼」をはじめ、支笏湖や樽前山など、千歳を連想させる言葉が盛り込まれ、昭和26年7月に発行された「広報ちとせ(当時は「千歳町弘報『ちとせ』」)第1号に紹介されています。長年、創作舞踊の指導などに力を注いできた千歳毎床会の毎床ソエ子さんは「以前は町内会の盆踊りや市の行事などでもにぎやかに千歳音頭を踊っていました」と話します。毎床さんのもとには、毎年盆踊りの時期になると市内のいろいろな団体の方から「盆踊りの振り付けを教えてください」という声がかかります。「ほかの踊りが広まったこともあり、千歳音頭を踊る機会は減っていましたが、最近は踊りを懐かしむ方から『教えてほしい』という声が少しずつ増えています。歌にあわせて飛行機のように手を広げるなど、振り付けにも『千歳らしさ』がある千歳音頭。これからも郷土の踊りとして伝えていきたいですね」と語ります。

昨年3月、市民活動交流センター「ミナクル」で行われたイベントで、千歳毎床会の皆さんが、会場のお客さんと一緒に千歳音頭を踊りました。「ミナクル」の松隈早織センター長は「もう一度復活させようとする活動に長年取り組んでいる市の女性団体協議会からの話がきっかけとなり、イベントで千歳音頭を踊ったのですが、参加した皆さんからの反響が大きく驚きました」と振り返ります。支笏湖の国立公園指定などを記念してつくられた千歳音頭の歌詞は公募により決められ、北



千歳毎床会  
毎床 ソエ子 さん

自宅で創作舞踊の教室を開いているほか、町内会や企業などの団体、学校などに出席、踊りの楽しさを伝える活動に取り組む。

郷雪夫さんの詞が採用されました。ところが、千歳の情景を手く盛り込まれたその歌詞の作者について、残された記録はあまりにも少なく、情報を集めようにも、手がかりはほとんどありませんでした。松隈さんが所属する市民団体「ちとせタウンネット」では、千歳音頭を再び広めるにあたり、昨年4月、新聞やインターネットを通して作詞者である北郷さんの情報を呼びかけました。それから半年以上が経過した昨年の12月、一通の手紙が届きました。手紙の送り主は、遠く福島県に住む北郷さんご家族の方でした。